

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山本 芳久

現代の「人格(person)」概念の淵源とも言うべき中世の「ペルソナ(persona)」概念は、元来、「三位一体論」と「キリスト論」の文脈で用いられたものであり、トマス・アクィナスにおける「ペルソナ」概念もその例外ではない。しかし、本論文は、そのような「ペルソナ」概念の研究ではなく、「ペルソナ」という語をキーワードにして、トマスの人間論を倫理的・存在論的に再構成し、その現代的意義を示すことを目的とするものである。

第Ⅰ部「理性的実体としてのペルソナの基本的構造」においては、トマスにおける(人間の)ペルソナの存在論的な基本構造が明らかにされている。すなわち、第一章「人間論的概念としてのペルソナの輪郭」では、トマスが「自存的・自立的な実体」として定義している人間のペルソナの根本性格と構造が解明され、第二章「ペルソナの自己根源性——被造物としての人間の自立性」では、トマスの人間論において被造物としての人間にどのような自立性と意志の自由が認められるのかが示されている。

第Ⅱ部「ペルソナにおけるはたらきの構造(1)——知性のはたらき」においては、人間の知性のはたらきにおけるペルソナの自立性と関係性が明らかにされている。すなわち、第三章「知性認識におけるペルソナの自立性と関係性」では、トマスが魂の「固有性」と規定する知性が、認識において、自立的であると同時に他者との関係を含んでいるということが示され、第四章「神認識におけるペルソナの自立性と関係性——神の把握不可能性の含意するもの」では、自然的理性によって神を認識し尽くすことはできないというトマスの主張は、被造物全体も、更には我々自身も認識し尽くすことはできないということを含意しており、我々を果てしない探求へと促すという意味を持つということが明らかにされている。

第Ⅲ部「ペルソナにおけるはたらきの構造(2)——意志のはたらき」においては、他者との関係性が実践的・倫理的観点から解明されている。すなわち、第五章「根源的な受動性としての愛——ペルソナの全体性における情念の意味」では、受動性(情念)としての「愛」というトマス独特の概念の解明を通して、その「愛」は原因としても結果としてもまたそれ自体としても他者との「一致」に存することが示され、第六章「ペルソナとペルソナの相互関係——『友愛』における一性の存在論」では、他者との友愛関係が自己および他者の善を実現するものであるというトマスの考え方が明らかにされている。

筆者の論述は極めて明快で説得力があるが、個々の問題を哲学的にもっと掘り下げる必要もあるだろう。とは言え、本論文は、トマスが主題的に論じてはいない問題をテーマとして立て、そのテーマに関連するテキストをトマスの作品群から拾い集めて筆者独自の観点から論を構成したものであり、この点で筆者の独創性と手腕は高い評価に値する。よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判定する。